

博物館活動としての被服製作 第2報

—クッションカバー—

加藤 祥子 (愛知教育大学家政教育講座)

(2006年10月27日受理)

Production of Sewing Item which was done in the Museum Part II

—Cushion Cover—

Shoko KATO (Department of Home Economics, Aichi University of Education)

要約 2006年7月末から8月初めの土日にトヨタテクノミュージアム産業技術記念館で行われた『夏休みワークショップ』で「オリジナル素材を使ったモノづくり体験」と題して博物館内の自動織機で織り上げた布を使ってクッションカバーを作った。「モノづくりの楽しさ」として被服製作を見直し「被服離れ」、「ミシン離れ」を解消することを目的とする。2回目の試みでもある今回は、参加者を小中学生に限定して行い、作品完成までの製作時間を30分として布の前処理、裁断、縫製の最初の工程は本研究室で準備した。参加者には最終段階のみを作ってもらい、参加人数、学年・性別による製作時間を調査した。また指導者として参加した学生にアンケート調査を行い、次回に繋げる反省とした。

2週に渡る土曜、日曜の計4日間の取り組みだったが約400名の参加をみた。ミシンに触れた事のない小学校低学年の児童も作品作りに興味を持ち、楽しそうに参加していた。主催する側として昨年度に行った同取り組みの課題を克服して今期に臨んだが、活動が概ね成功であったことは昨年度に残された課題の解決が妥当であったと考えられる。

Keywords : ワークショップ, モノづくり, ミシン

1. はじめに

「モノづくりの楽しさ」として被服製作を見直し「被服離れ」、「ミシン離れ」を解消することはできないだろうか。当面困難であろうと思われるわかりにくく、難しいステップが集中している前工程を終わらせておいて、最後の工程のみを経験させ、柄合わせの効果や、縫製技術の善し悪しを自分の作品の中から学ばせ、美しい作品として完成の喜びを味わわせたい。そしてそれを「モノ作りの楽しさ」へつなげ、被服製作全般への興味関心を掘り起こしたい。

第1報¹⁾では昨年度トヨタテクノミュージアム産業技術記念館で行った『夏休みワークショップ』での取り組みを通して検証した。

館内で織った生地を使い5作品を用意したが、ペットボトルカバーは完成するとすぐに手持ちのペットボトルを入れ、完成させた手提げ袋もすぐに荷物を入れて活用していた。アームカバーや三角巾も身につけて完成を喜んでいて。作ってすぐに使用できる物を製作することで物作りの意欲が沸き、興味、関心につながる事がわかった。

製作する作品は最初の工程からでなくても充分達成感を感じ、楽しんでいるように思われた。また次は始

めから作ってみようという意欲も感じられた。

本年度は7月末の土日、8月初めの土日、4日に渡って行ったが、作品をクッションカバー1点に絞り、織り工程から参加して、縫い代を含むサイズの検討を行った。作品の準備だけでなく、第1報で反省材料となった教授法や、指導者や参加者についての問題点を克服して、指導体制についても入念に準備して臨んだ。

2. 夏休みワークショップの概要

『夏休みワークショップ』とは産業技術記念館で行っている夏休みの子ども向けイベントである。2006年度は以下のように開催された。図1はイベントのポスターである。

日時：2006年7月29日(土)、30日(日)

8月5日(土)、6日(日)

9:30~17:00

場所：トヨタテクノミュージアム産業技術記念館
館内 特設会場

内容：オリジナル素材を使ったモノづくり体験



図1 夏休みワークショップのポスター

記念館で稼働状態にある機織機の展示があるが、当日実際に織っている生地を使って製作している。

図2は作品に使用した生地である。

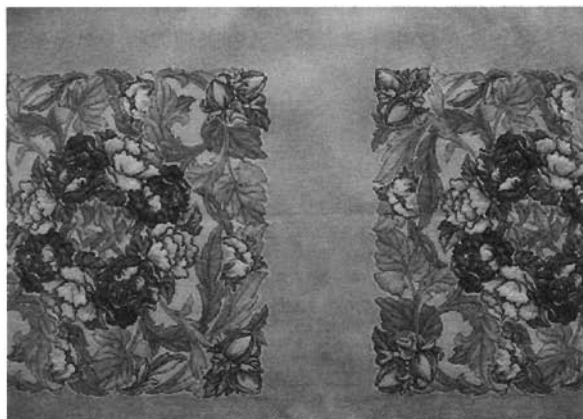


図2 作品に使用した生地

「オリジナル素材を使ったモノづくり体験」をテーマに、最終工程を残したクッションカバーを30分で仕上げられるよう準備した。

指導者としての参加学生は女子学生8名である。

3. 昨年度の反省点と本年度の改善

まず、教授法としては昨年度危険回避のためにミシンやアイロンの位置に張り付いていた指導者を止めて、一人の子どもに一人の指導者が張り付き、最初から完成までを責任を持って指導することにした。従って、参加者は指導者を見失うことはない。

次に昨年、5作品を取り上げたことにより、作品列の混み具合に応じて指導担当でない作品についても途中から指導することになり、指導者として困った経緯

から、本年度はクッションカバー1作品のみを対象とすることとした。

最初からポスターにて参加対象を小中学生に限定したことによって、大人の同伴者が作品を完成させてしまい、子どもに作らせないことは避けられた。趣旨説明も要らなかった。

また受付でブロックして参加者を管理することによって、一人で何枚も持って行ってしまうことや、沢山の入場者で当日の準備数が足りなくなる事態を回避することができた。

また幼年の参加も見送ったので、ミシンの操作に支障が出るような身長の高い子どもの参加はなかった。



図3 完成作品

4. サイズ等の検討

用布のサイズ(縦、横)と縫い代の設定を行った。

布の取り方はいくつかあるが、横長で検討する。

横幅の最大値が1670mmと機械の設定で決まっているため、その範囲で40cm四方の市販のクッションの入る大きさと縫い代を確保した。

今回は前回の反省として裁断の手間を少しでも減らすために、連続して織り上げられる柄の間にある縫い代の中心に縦横色を変えた織り糸を織り込んで貰い、裁断線として利用した。

図4は採用したサイズと裁断線の位置である。

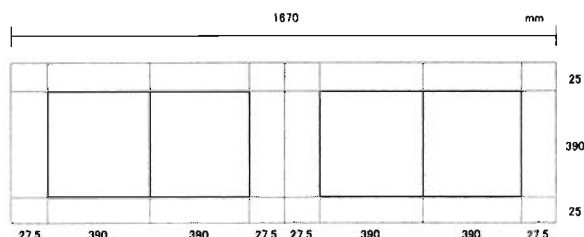


図4 採用したサイズと裁断線の位置

5. 製作工程の検討

当日は前回同様、家庭科の授業の始まっていない小学校低学年の参加も見込み、経験がなくても簡単に作

品を完成させる事が出来るように、最初の工程から製作するのは避け30分以内で完成できるよう準備した。

準備した工程は次の通りである。

- ① 生地を裁断
- ② アイロンをかける
- ③ 両端（縦）をロックミシンでほつれ止めする
- ④ ファスナーを付ける

ファスナー付けの工程は一部簡略化したが下記の11工程がある。

- ① 縫い代をまち針で留める
- ② ミシンで縫う
- ③ アイロンで割る
- ④ 片方の縫い代を縫い目より3ミリ出してアイロンで輪にする
- ⑤ ①でできた輪を務歯の近くにしつけする
- ⑥ 3ミリの中心をミシンで縫う
- ⑦ 縫っていない方の縫い代をアイロンで起こす
- ⑧ ファスナーと縫い代を縫い合わせる
- ⑨ 表に返す
- ⑩ ファスナーの最後のステッチとなる印を洋裁用水性ペンでかく
- ⑪ ミシンで縫う

当日の工程は

- ① 表からリッパーを使って最初の縫い目をほどこき、ファスナー付けの最終工程を終わらせる。
- ② 裏返す
- ③ 上下の縫い代を待ち針で留める
- ④ ミシンで縫う
- ⑤ 裁ち端を鉋で切る
- ⑥ ロックミシンを指導者にかけて貰う
- ⑦ ミシン縫いの位置でアイロンをかけて折る
- ⑧ 角を持って表に返す
- ⑨ 目打ちで角を整える
- ⑩ 仕上げのアイロンをかけてできあがり

当日の工程については当日の様子から図5～12に示す。



図5 工程①リッパーを使う



図6 工程③上下の縫い代を待ち針で留める



図7 工程④ミシンで縫う

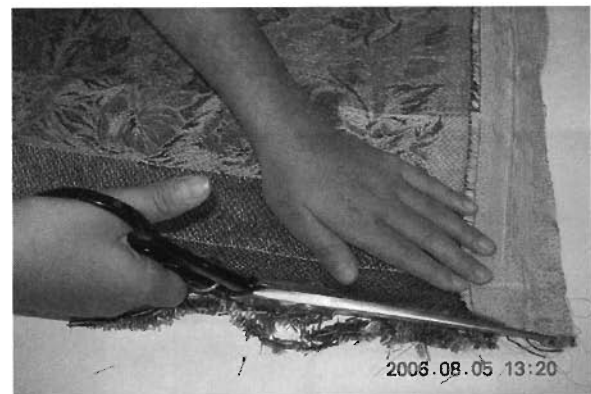


図8 工程⑤裁ち端を鉋で切る



図9 工程⑥指導者がロックミシンをかける



図10 工程⑦アイロンをかけて折る



図11 工程⑩仕上げのアイロン



図12 できあがり

6. 準備数

作品の準備数は500枚である。1日分の準備数を100枚として4日分の400枚と予備として100枚を準備した。

7. 会場の配置

当日の会場の設営は図13に示す。

扱いが困難なロックミシンは本研究室の者が行う。

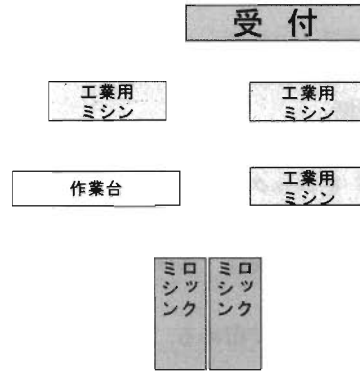


図13 会場の配置

8. 初日からの改善点

初日の1人の指導者に1人の子どもが就くシステムでは参加者が集中しても、1:1の対応なのでそれ以上の入場ができないという問題がみられた。従って参加を待つ長蛇の列ができた。

この問題を改善するために2日目からは入り口に設けた受付で整理券を配り、同伴の子どもには指導者が全員を一緒に指導することとした。2名での参加が多く、最大4名であった。(図14)

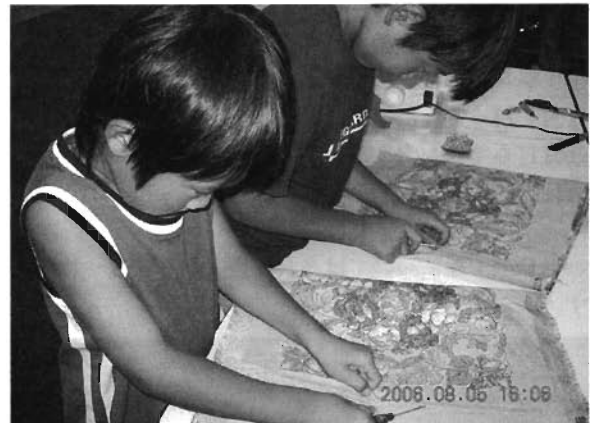


図14 複数を指導する

9. 結果

9-1 記録

最初の2日間の活動を終えて指導に慣れたところから、最終の2日間には参加学生に指導した子どもの学年と性別、かかった時間をメモしてもらい、今後の活動の参考にする。また時間を計ることによって最終段階として残した工程が妥当であったかも検討した。

表1は参加者を性別、学年別に示した表であり、

図15はそれを棒グラフで表したものである。

表 1 後半 2 日間の参加者

学年	性別	
	男	女
小学1	7	11
2	10	16
3	8	29
4	12	21
5	6	20
6	5	20
中学1	1	3
中学2	2	3
中学3	0	1

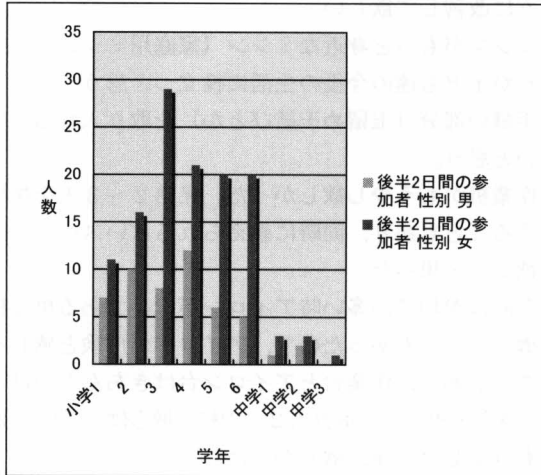


図15 後半 2 日間の参加者

3年生女子の参加が非常に多いが2, 4, 5, 6年生の女子も多く参加していることが分かる。

表 2 は参加数の多い小学生女子の完成までにかかった時間である。

表 2 小学生女子の学年別製作時間

番号	学年(小学生・女子)					
	1	2	3	4	5	6
1	22	20	24	15	20	20
2	22	23	25	22	20	21
3	25	25	25	23	20	23
4	27	26	25	23	22	25
5	27	26	26	24	23	25
6	29	27	27	25	24	25
7	30	29	27	25	25	25
8	30	30	28	25	25	26
9	35	31	28	27	25	28
10	37	31	29	27	26	29
11	40	32	29	28	26	29
12		32	30	29	27	30
13		35	30	29	29	30
14		35	30	29	30	30
15		35	30	30	30	30
16		40	30	30	33	31
17			30	30	35	31
18			30	31	35	31
19			30	35	37	32
20			30	35	39	35
21			31	35		
22			31			
23			31			
24			32			
25			32			
26			34			
27			35			
28			39			
29			40			
平均	29.4545	29.8125	29.931	27.4762	27.55	27.8

学年にかかわらず30分前後で完成しており, 残した工程はおおむね妥当だと思われた。

9-2 アンケート

今後の活動の参考とするため, 前回同様, 参加学生に対してアンケート調査を行った。今回は前回の反省を踏まえ, 改良して臨んだこともあり以下の5点について調査した。

質問 1 : 指導していて気づいたこと, 困ったことがありますか。

質問 2 : 注意して指導した方がいいと思った点はどこですか。

質問 3 : 次回, 同様の活動を行う場合, 改善した方がいい点はどこですか。

質問 4 : 最終段階として残した工程は妥当だと思われましたか。

質問 5 : 参加した感想

9-2-1 質問 1 : 指導していて気づいたこと, 困ったことがありますか。

- 複数の指導は進度が違い, 教えるのが大変だった。
- 小学校低学年の児童は話を聞く前に自分で始めようとする。
- 5, 6年生でも学校等での経験が全く or ほとんどない子が多数だった。
- リッパーを突き刺しそうでヒヤヒヤした。

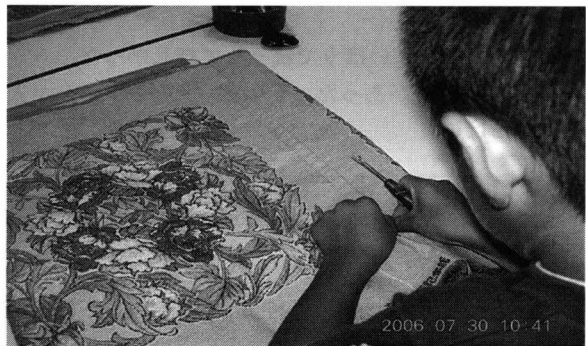


図16 初めてリッパーを使う

- 最後, 表に返す時の角の出し方で, 子どもの小さな手だと布を手繰り寄せられないためできない。
- 学年にあわせて要求するレベルを変えたほうが良いのか, それとも, 小学校1年生にもきちんとしたレベルを要求するほうが良いのか迷った。
- 1年生には裁ち罫が大きすぎて使いにくそうだった。
- 何度指導しても直らない時があった。
- 兄弟や友達と一緒にやりたがるので, 何人もの子供を一度に教えるのが大変だった。4人一緒に来た時は手一杯で困った。

9-2-2 質問 2 : 注意して指導した方がいいと思った点はどこですか。

- 学年によって一人のできる内容が違うから, 目安を

決めておくといい。

- リッパーの扱い方。持ち方が反対だったり、手前で切ろうとした。手に刺しそうな子もいてしっかり指導すべきだと思う。
- リッパーの扱い方。指導していて、一番教え方が難しく危険だと感じたから。一番時間がかかった。一番先の縫い目の一つを切るということがなかなか理解してもらえず、切り進むのに時間がかかってしまった。
- リッパーを上手に使えない子が多くて、布を破りそうになったりなかなか糸が切れなかったりした。
- 裁ち鋏がなかなかうまく使えない。



図17 裁ち鋏を正しく使う

- 布をわかりやすいほうで統一してほしい。
- 効率が悪い時があった。(ミシン待ちや作業台が人でいっぱい)



図18 作業台が足りない

- まち針のうち方で、布をすくう幅が大きい子や上の1枚の布しか針が通ってない子がいたので注意して見ていた方がいい。
- アイロンをかけた直後は布が熱くなっていること。
- こちらが十分注意しても隣のアイロンが危険だ。

9-2-3 質問3：次回、同様の活動を行う場合、改善した方がよい点はどこですか。

- 兄弟など二人以上の場合には同時に教えるのか、一人ずつ教えるのか決めておくといいと思う。
- 2～3人を一緒に作業させるのは大変なので1対1でできるといい。
- 親が手や口を出すことがよくあったので子どもが1人で最後まで作れるような場だといい。
- 兄弟、友達同士で来た子ども2～3人を1人で指導するのは大変なので、なるべく1人に1人つけるように改善してほしい。
- ミシンがもっと身近なミシン(家庭用ミシン)のほうが子ども達の今後の生活に役立つと思う。
- 手縫い部分(玉留め玉結びとか)を取り入れるといいと思う。
- 作業机がもう少し欲しかった。兄弟2～3人を指導することもあり、同時に教えられる広いスペースが欲しいと思った。
- 今回は参加者が多い時アイロンが置いてある机で指導したこともあったので、アイロンが危険と感ずることもあり、作業台とアイロン台はきちんと分けるべきだと思った。道具も2つの机で散らばってしまう。
- もう少しゴミ箱が欲しかった。
- 裁ち鋏は小学校低学年の子には扱いづらいと思う。
- 布の織り方が2種類あったが、1種類の方が良い。複数で一緒に作る時、一人一人に説明するのが大変だ。
- 布の色が変わっている線を利用する場合、全て見やすい方で統一してほしい。

9-2-4 質問4：最終段階として残した工程は妥当だと思われましたか。

- 良かったと思う。リッパー作業は結果が目に見えてみんな楽しそうだった。
- 低学年でもできたので妥当だとは思いますが、リッパーやミシン、裁ち鋏など危険な作業が多い。
- ミシンを使う場面もきちんとあり、子どもが「自分で作った」という満足感を味わえたと思う。



図19 小学1年生のミシンがけ

- 子どもの年齢にもよるが、30分を目安ならいいと思う。
- みんな楽しんでやっていたから妥当だと思う
- 時間配分的に妥当。
リッパー、待ち針、ミシン、はさみ、アイロンなど裁縫の基本を少しずつもりこめていたので子ども達に学ばせる上でもよかったと思う。
- 最初の所はファスナーが長いため、リッパーが上手く使えない子は集中力が切れてしまっていた。低学年の子にやらせるのは難しいと感じた。

9-2-5 質問5：参加した感想

- 子ども達に教える楽しさが改めて発見できた。もつと裁縫が好きになって欲しいという気持ちが増した。
- 慣れてきたらスムーズに教えることができた。学年によって大変さが違うというのを一番実感した。様々な子どもと接することができてとても楽しかった。
- 子どもと触れ合いつつ今の実態がわかるのでとてもいい機会だった。子どもにとっても私にとってもいい体験になった。機会をもっとふやして欲しい。
- 子どもは自分で作ったという達成感に満ちていたので今後の生活に活かせると思う。
- ミシンもよいが手縫いができない子が多いのでそういう実態に即したワークショップもやりたい。
- 指導した子どもが出来上がった作品を嬉しそうに持って帰る姿を見て、こちらまで嬉しくなりやりがいがあった。今の小中学生がどれくらいの知識や興味を持っているのかも知ることができて、いい機会だった。
- 本当に楽しく、勉強になることばかりだった。
- どの学年の子どもにも分かるように指導することは難しく、使う言葉も選んだ。また、どの学年の子が、どの程度出来るかと言うことも分かった。
- 普段あまり接する機会がない子どもたちと一緒に作業が出来て本当に楽しかった。
- 今回は縫う線が初めからつけられていたり、ミシンの速度も一定に保たれていたのも、ミシンが上手に縫えていた。
- 作品が1種類だと準備も当日の進行も前回よりスムーズにできたように感じた。今回のように、他にも作るものがあるならば（絞りなど）、1種類でも子ども達は十分満足できると思う。
- 作業とは関係ないが、やはり休憩時間は今回のように、きちんと決められていた方がよかった。
- 子供に裁縫を教えるのは初めてだったが、だんだん慣れてきて楽しくできた。最初から自分で作ったわけではなくても達成感が得られていた様で、嬉しそうに持ち帰る姿が印象的だった。
- 初めてミシンやアイロンを使うという子が多かったのも、これをきっかけに好きになってくれると良い

などと思う。

- 大学で準備したファスナー付けが難しかった。

9-3 考察

リッパーや鋏類などの刃物があり、作業にはアイロンもはずせなかった。ミシンの指導も気を付けねばならない。危険物に囲まれての作業だったが、それぞれの機転で乗り切っていた。危ないから使わせないではいつになっても上達は望めない。今回小学1年生でも上手にリッパーや鋏類を使いこなし、ミシンもかけていた。完成までにかかった時間も小学1年生から中学3年生までほぼ30分であり1：1の指導のたまものである。また指導した学生の熱意も通じたものと思われた。

10. おわりに

2006年7月末から8月初めの土日にトヨタテクノミュージアム産業技術記念館で行われた『夏休みワークショップ』で「オリジナル素材を使ったモノづくり体験」と題して、博物館内の自動織機で織り上げた布を使ってクッションカバーを作った。参加者を小中学生に限定して、最終段階のみを作ってもらい、学年、性別による製作時間を調査した。最終工程を残し作品完成までの製作時間を30分とした布の前処理、裁断、縫製の最初の工程であるファスナー付けを本研究室で行った。

2週に渡る土曜、日曜の計4日間の取り組みだったが約400名の参加をみた。

ミシンに触れた事のない小学校低学年の児童も作品作りに興味を持ち、楽しそうに参加していた。

昨年に続いて2回目の試みでもあり、主催する側として昨年度に行った同取り組みの課題を克服して今期に臨んだ。

今回の活動が概ね成功であったことは昨年度に残された課題の解決が妥当だったことが考えられる。

お手伝い頂いた本学家庭専攻1年生から4年生までの皆様、一人一人に深謝致します。皆様のご協力なければ成功しなかった活動です。今後も同様な取り組みを行って物作りの楽しさを知ってもらい、被服製作に関心を持ってもらおうと思っております。

引用文献

- 1) 加藤祥子：博物館活動としての被服製作 第1報、愛知教育大学研究報告第56輯（芸）、2007、3月